

歴史が物語になるとき：

Brian Frielの *Freedom of the City* に見る “Histoire”

小沢 茂^{*1}

人間の認識は常に信頼できるとは限らない。時として、われわれが「見ている」と思っているものが、実は「見ていると思っている」ものであるような場合がある。建築家の David Macaulay は、「学生にスケッチを教えるとき、最初にするのは、見ているものと、見ていると思っているものを区別させることだ」と言う (410)。これは観察者の主観によって客観的事物の認識がゆがめられ、存在しているものではなく、観察者が存在していると思っているものの認識になっていることを示している。こうした、主観によって事実がゆがめられる現象は、はるかに大きなスケールでも見ることができる。歴史の記述はその一例である。歴史とはそもそも歴史家の主観性を抜きにしては語れない。E. H. Carr が指摘しているように、歴史は決して客観的事実の連続ではなく、著者の主観的解釈と密接に関係しており、もし歴史家の解釈がなければ客観的事実だけでは意味をなさなくなってしまうだろう (35)。このこと自体は特に問題ではないのだが、この主観性が肥大してくると、時として、事実を、特定の歴史観にあわせて歪曲し、事実から離れた歴史を作り上げることがありうる。こうなってくると、作り上げられた歴史はもはや事実を客観的に映し出したものではなく、特定の歴史観によってねつ造された虚構の物語になっていくことになる。フランス語の “histoire” が、「歴史」と「物語」の両方を指すように、歴史と物語の境界があいまいになり、区別がつかなくなってしまうのだ。

北アイルランドに根強く存在し、1960年代後半から激しさを増してきた、“Troubles” と呼ばれる紛争もまた、「歴史」と「物語」が融合して現れるケースの一つである。中でも、1972年1月30日にデリー市（イギリス側の名称はロンドンデリー市）で起こった、通称「血の日曜日事件」は注目すべきである。これは、公民権運動のデモ行進をしている市民に対して英国軍が発砲、13人の市民が死亡したという事件だが、現在もなお、真相が明らかになっておらず、英国による公式の調査は、英国側の非を隠蔽するための “cover-up,” つまり、事実に基づいていない「物語」であった疑惑がもたれている。

アイルランドの劇作家、ブライアン・フリール (Brian Friel) の作品、*The Freedom of the City* は、「血の日曜日事件」に触発されて書かれ、その中で、北アイルランド紛争の背後で、「歴史」と「物語」がどのように融合しているのかを暴き出している。本論では、*The Freedom of the City* の中で、歴史と物語が一体となった “Histoire” がどのように現れているかを分析する。

※1 外国語教育センター

1

まず、*The Freedom of the City*と血の日曜日事件との関連について検討する必要がある。というのも、この作品は血の日曜日事件を直接的に描いたルポルタージュ的な作品ではないからだ。かといって、事件と全く無関係であるとは言い切れないという複雑な事情がある。

Dantanusが指摘するように、フリールはこの作品と政治的現実との間に距離を置くために、いくつかの工夫をしている(134)。もともと、フリールは舞台を事件の2年前に設定し、描いているのは血の日曜日事件ではないことを暗示していた。さらに、事件の起こった1972年の二年前に舞台を設定し、血の日曜日事件をそのままルポルタージュ的に描くのではなく、血の日曜日事件を思わせるけれども、厳密には別の事件を劇中で描くなど、事件の直接的な描写からは距離を置こうとしている。

だが、観客はこれを「血の日曜日事件」を描いたものだと解釈した。上演後、これを「北アイルランドのテロリストの肩を持ったプロパガンダ」と受け止め、批判する声が多くあがった。劇評もおおむねこの点について酷評であり、安易に政治的なメッセージを発することを強く非難するものもあった。こうした反応は、この演劇の内容が、デモ行進がおこなわれている中、英国軍の発砲により三人の市民が死亡するという、血の日曜日事件に類似しているものであることに加え、登場人物の裁判官のせりふが一部、件のウィジャリー・レポートから引用され、特に結論部分などはほとんどウィジャリー・レポートの引き写しであることにより、特に事件後まもない上演では、観客の多くにとっては血の日曜日事件を容易に想起させるものであったことが原因と考えられる。せりふのみならず、犠牲者が武装していたことの唯一の証拠としてパラフィンを用いた硝煙反応が採用されるなどの、ウィジャリー・レポートとの共通点も見られる。McGrathのように、「劇全体がウィジャリー・レポートから生じている」(106)とまで言い切れるかどうかは別としても、かなりの部分がウィジャリー・レポートをもとにしていることは多くの批評家が指摘するところである。

このように、この作品と血の日曜日事件とを完全に切り離して考えることは難しい。だが、一方で、この作品は映画*Bloody Sunday*のような、実際の血の日曜日事件を描いたドキュメンタリーでもない。フリールは血の日曜日事件という実際の事件を、フィクションの形で描くことによって、局地性を手放すと同時に、より普遍的なテーマを手にすることができた。そのテーマが、歴史と物語との融合であり、それが政治的紛争の中でどのように現れるかをこの作品は描き出している。

歴史と物語の融合というテーマは、作品の構造とも関連している。*The Freedom of the City*の最も注目すべき特徴の一つが、その二重構造である。これは、舞台となったギルドホールの中の出来事を観客だけに見せておき、それと平行して、その出来事を見るができなかった裁判官、レポーター、軍の報道官、バラッド歌手といった人々が、どのようにギルドホールで起きたことを解釈し、歴史的事実として定着させていくか、ということを描く、というものである。この二重構造によって、観客は、自分たちが見ているギルドホールの中の出来事が、いかに歪曲され、一見歴史であるかのように見える「物語」へと変貌していくか、また、その「物語」が事件の背後でどのような役割を果たしているか、を見ることができるのである。

演劇は、三人の遺体が舞台上にあるところから始まる。続いて裁判官が現れ、事件を審理し始める。この過程で、事件の真相が舞台上で演じられ、観客に明かされると同時に、その真相を知るこ

とができないさまざまな人物が、事件の真相を解明しようとする。Andrewsの言うとおりに、この演劇は「出来事と、その解釈で構成される」(134)。観客は、「特権的な視点」(MacGrath 121)を与えられており、劇中のほかの登場人物が知ることのできない事件の真相にアクセスできる。

この演劇で描かれる事件はおおむね次の通りである。公民権運動のデモ行進の最中、警官隊によって使用された催涙ガスの被害を防ぐため、デモ行進に参加していた三人の市民が、手近な家のたまたま開いていたドアから中に緊急避難する。だが、その「家」とは、「プロテスタント支配の象徴」でもあったギルドホールだった。三人は、市長室の豪華な衣服を着たり、ワインを飲んだりして楽しんでいたが、三人がギルドホールに侵入したことを知った他の人々は、反乱分子によって意図的にギルドホールが占拠されてしまったと解釈する。その結果、軍隊がギルドホールを包囲し、「投降」を呼びかけ、三人は、投降するために丸腰でギルドホールの外に出て行く。ところが、軍隊は彼らに対して一斉射撃を行い、三人は射殺されてしまう、というものである。演劇は、この意見の描写を基盤として、そこにさまざまな人々の解釈が加えられるという形で進行していく。

2

まず、この事件を審理し、英国に有利な形で事実を歪曲し、英国公認の「物語」を形成するのが、裁判官である。彼は、「血の日曜日事件」の審理を行った、ウィジャリー判事をモデルにして描かれている。この作品の判事も、政府によってこの事件の調査を任されている。判事は自らの審理を称して「客観的」であるという(13)が、その客観性の中に判事の英国よりの主観性がひそみ、「イデオロギーの支配」や「階級の利益」(Andrews 134)のために「物語」を作り出す作家となっている。

この演劇の冒頭で、判事は死亡した三人の遺体を前に、三人の身元を調査するために警察官にくっつかの質問をするのだが、その質問に既に彼のバイアスが見て取れる。それは、事件の起こった社会的背景を無視することで、公民権運動の正当性について触れるのを避ける姿勢によって明らかである。

Policeman: Doherty. Elizabeth. Married. Aged forty-three years.

Judge: Occupation?

Policeman: Housewife. Also a cleaning woman. Deceased lived with her family in a condemned property behind the old railway — a warehouse that was converted into eight flats and —

Judge: We are not conducting a social survey, Constable. (12)

この会話で、死亡者の一人Elizabeth Doherty(劇中ではLilyという愛称で呼ばれる)が、およそ人間にはふさわしくないような“condemned property”の中で暮らしていることがわかる。判事はそのような貧困状態について警官が話すことを制止している。その理由を判事は述べないが、警官が話している内容が持つ意味について考えてみれば理解できよう。つまり、犠牲者が貧困の中にあつたことを公式に認め、事件の社会的背景について言及することは、貧困が差別政策のためであり、それを解消しようとする公民権運動にも存在意義があることを認めることにつながっていくのである。それが英国側にとって都合の悪いことは言うまでもない。判事はこのような、都合の悪

いことは対象としないような調査を称して「客観的」であるという。

Judge. — this tribunal of inquiry, appointed by Her Majesty's Government, is in no sense a court of justice. Our only function is to form an objective view of the events which occurred in the City of Londonderry., Northern Ireland, on the tenth day of February 1970, when after a civil rights meeting British troops opened fire and three civilians lost their lives. (13)

判事のこの「客観的」な姿勢が、実は主観的なものであるということが伺えよう。判事は“justice”という主観的なものを排除して、出来事の客観的な描写をしようと試みる。だが、結局のところ、そのような客観的な描写は不可能である。社会的背景を対象にしないことに加え、彼は無意識のうちに、自分が英国側に与する人間であることを暴露している。それは、地名“Londonderry”に見ることができる。この地名は英国人が使うもので、同じ都市を北アイルランドでは単にDerryと呼んでいる。裁判官は自分が英国側の人間であり、英国側から事件を調査していることを暴露しているのである。

判事の標榜する客観性にひそむ主観性は、調査の目的を述べる場面でも明らかになっている。

Judge The facts we garner over the coming days may indicate that the deceased were callous terrorists who had planned to seize the Guildhall weeks before the events of February 10th; or the facts may indicate that the misguided scheme occurred to them on that very day while they listened to revolutionary speeches. (13-14)

ここで、Corbettが指摘しているように、判事ははじめから、三人が革命的意図を持ってギルドホールを意図的に占拠したという前提で話を進めている(148)。判事の考えの中には、三人が計画的なテロリストであったか、あるいは一般市民が突発的にテロリストに変わったか、という発想しかないのである。一般市民が偶然にギルドホールに迷い込んだという発想が欠如している。このことは、判事が、公民権運動とテロを関連づけ、ギルドホール占拠に対して意図的な権威への反逆、挑戦行為であるという先入観を持っていることを示している。

判事が英国側に立っていることは、複数の意見が対立する状況で、より顕著に表れることになる。複数の批評家が指摘しているように、判事は複数の意見が対立する場合は必ずイギリス側の肩を持つわけだが、その顕著な例は、犠牲者が発砲していたかどうかという問題である。

この事件において、三人が先に発砲し、反撃を受けて死んだのか、あるいは無抵抗で投降してきた三人を一方的に射殺したのかでは解釈が全く違って来る。反撃ならば非は犠牲者側にあるが、一方的な射殺であれば英国側が責任を持たなければならない。三人が武装していたかどうか、これは劇中の審理におけるもっとも重要なポイントの一つである。この点について、目撃者の証言は食い違っている。

Judge. We have heard, for example, the evidence of Father Brosnan who attended the deceased and he insists that none of the three was armed. And I have no doubt that Father Brosnan told us the truth as he knew it. But I must point out that Father Brosnan was not present when the three emerged from the building. We have also the evidence of the photographs taken by Mr. Montini, the journalist, and in none of these very lucid pictures can we see any sign whatever of weapons either in the hands of the deceased or adjacent to their person. But Mr. Montini

tells us he didn't take the pictures until at least three minutes after the shooting had stopped. On the other hand we have the sworn testimony of eight soldiers and four policemen who claim not only to have seen these civilian firearms but to have been fired at by them. (49)

神父、ジャーナリストの証言によれば、三人は武装していないという。だが、裁判官はそれに反論する。この一節からは、神父は三人が撃たれてからしばらくして現れたものであることがわかるが、それがどのくらいの時間なのかかわからない。それに対して、ジャーナリストは発砲があつてからはやくて三分後に写真を撮影した。従つて、裁判官がここで示唆しているのは、発砲があつてから三分の間に銃器が何者かによって持ち去られたかもしれない、ということである。だが、結局のところそのような現場を目撃したという情報は、劇中の判事のせりふからはうかがえないし、持ち去られたという証拠も言及されることはない。また、演劇冒頭で、裁判官は遺体を調べた警察官に対して、遺体のそばに武器があつたかどうかを尋ねているが、警察官は否定している。しかし、この場で裁判官はその証言を取り上げることはない。一方、警察官や軍隊は、確かに三人が武装しており、あまつさえ発砲したことまで目撃した、という証言をしている。つまり、証言は食い違つていて、裁判官は決定的な証拠がない限り、どちらとも判断しかねることになる。

判事は証言の食い違いに最終的な解決を与えるために、パラフィン・テストを物的証拠としてとりあげる。このテストを、病理学者のウィンバンは次のように説明する。

Judge. Dr. Winbourne, in your earlier testimony you mentioned paraffin tests you carried out on the deceased. Could you explain in more detail what these tests involved?

Winbourne. Certainly, my lord. When a gun is fired, the propellant gasses scatter minute particles of lead in two directions: through the muzzle and over a distance of thirty feet in front of the gun; and through the breach — And a characteristic of this contamination is that there is an even-patterned distribution of these particles over the hand or clothing. (50)

ウィンバンは、パラフィン・テストを説明するようになつてはいるにもかかわらず、肝心のパラフィンの役割について何ら説明しない。実際は、パラフィン・テストとは、鉛ではなく硝酸塩を検出するものであり、ウィンバンの説明は間違っている。火器を発砲した際に残される痕跡を射撃残渣と言うが、その専門書には次のように書かれている。

The Paraffin Cast or Dermal Nitrate Test relied on the color reaction of the nitrate recovered on the sampling surface with diphenylamine reagent. A warm paraffin was poured on the hands of a suspected shooter and allowed to cool. The cast was pulled off of the hands and the adhering residue was subjected to diphenylamine reagent. Although this method gave a positive reaction for nitrates, many other substances also gave positive results for this test, thus making this method an unreliable indicator of GSR. (41)

パラフィン・テストとは、ウィンバンのような、鉛の分子の検出に用いられるテストではなく硝酸塩を検出するテストである。そして、“unreliable indicator” とあるように、確実に硝酸塩「だけ」を検出できるものではない。パラフィンが変色したからと言って必ずしも硝酸塩があるという証拠にはならず、決定的なものとはいえない。

さらに、たとえ硝煙反応があつたとしても、確実に発砲が行われたことにはならない。この曖昧

性についてはウィンバン自身も心得ている。鉛と硝酸塩を間違えているのをのぞき、ウィンバンはこの曖昧性についての確に説明する。

Judge. What I mean is, if these lead particles are found on a person, does that mean that that person has fired a gun?

Winbourne. He may have, my lord. Or he may have been contaminated by being within thirty feet of someone who has fired in his direction. Or he may have been beside someone who has fired. Or he may have been touched or handled by someone who has just fired. (50)

しかし、ウィンバンは、こうした曖昧性を承知の上で、犠牲者の一人マイケル・ヘガティの左手の甲と、親指と人差し指の間でパラフィンテストが陽性を示したという理由で、次のように断定する。

Judge. But you are certain that Hegarty at least fired?

Winbourne. That's what the tests indicate.

Judge. And you are personally convinced he did?

Winbourne. Yes, I think he did, my lord. (51)

ここでは、テストの曖昧性について言及したばかりのウィンバンが、主観的に、ヘガティが発砲したと「判断」する。科学者としてとらなければならない客観性を捨てて主観的な確信を述べているのである。パラフィン・テストに信頼性が乏しいことはすでに引用したが、電子顕微鏡などを使用した、現代の最先端の鑑識捜査でも、火器が発砲されたかどうかの確証は得られない。先に引用した専門書には次のように書かれている。

Q: If unique or characteristic particles were detected in the submitted samples, can an examiner say that a particular individual fired this weapon?

A: One can never say a particular individual discharged a firearm, only that that individual was in an environment of primer residue. (135)

パラフィン・テストよりも精密なテストを使っても確証がもてないことを、信頼性が劣るパラフィン・テストで確実に立証できるはずがない。ウィンバンは科学者としての中立的な姿勢を捨てて英国に有利な証言をする。この主観的判断には、彼の立場が無関係であるとはいえない。彼は陸軍の軍医であり、英国の権威の側に存在しているからである。このウィンバンの「確信」をもとに、裁判官は次のような最終的な判断を下す。

Judge. ... I must accept the evidence of eye-witnesses and various technical experts that the three deceased were armed when they emerged from the Guildhall, and that two of them at least — Hegarty and the woman Doherty — used their arms. (79)

裁判官は、最終的に、「武器を携帯していなかった」という目撃証言には触れず、「武器を携帯し、発砲した」という証言のみを取り上げ、また、信頼性の少ないパラフィン・テストの結果のみを証拠として採用し、三人が武装していたと判断するのである。このような判断はイギリスよりのものであると言わざるを得ない。審理開始時のせりふで確認された先入観が大きく影響した判断といえるだろう。その点で裁判官の「客観的捜査」は、事実の客観的な分析ではなく、「武装したテロリストを射殺した」という先入観にとって都合のよい証拠のみを取り上げ、虚構の物語を構築してい

く姿勢であるといえる。

この、「歴史の物語化」は、実際の事件を審理したウィジャリー判事の報告書、ウィジャリー報告にも、疑惑がもたれているものである。ウィジャリーもまた、パラフィン・テストを事実上唯一の証拠として、射殺された14人の市民が武装していたと判断していた。Corbettが指摘するように、ウィジャリー報告全体が“cover-up”であった(143)かどうかは断定できないが、現在、「新たな証拠」が発見されたことを理由に、事件の再調査が進められている。

3

この演劇で描写されるのは、このような英国側の問題点だけではない。アイルランド側もまた、英国側に立つ判事が事実からかけ離れていくのと同様、ギルドホールの中で実際に起こったことから離れていき、宗教的、民族的な歴史認識に基づいて、物語を形成していく。

演劇中、アイルランドの「市民の声」を代表するように登場するのが、バラッド歌手と子供たちである。彼らもまた、三人がギルドホールに侵入したことを偶発的な事故とほうけとらない。三人を英国に立ち向かう英雄と位置づけ、歴史上何度も繰り返されたアイルランドの蜂起と二重焼きにして神格化したうえで、彼らへの賛歌を歌うのである。

Balladeer. A hundred Irish heroes one February day
Took over Derry's Guildhall, beside old Derry's quay.
They defied the British army, they defied the RUC.
They showed the crumbling empire what good Irishmen could be.
The Children join in the chorus.
Children. Three cheers and then three cheers again for Ireland one and free,
For civil rights and unity, Tone, Pearse and Connolly.
The Mayor of Derry City is an Irishman once more.
So let's celebrate our victory and let Irish whiskey pour. (23)

何度も繰り返される武装蜂起はアイルランドでは英雄視される。鎮圧され、殺された首謀者たちは神格化されることになる。ユナイテッド・アイリッシュメンを指導したトーンとイースター蜂起にかかわったピアス、コノリーは生きた時代が違うのだが、バラッド歌手や子供たちはそれらを同一視している。この単純化された見方がアイルランド市民の声として描かれることになる。すなわち、彼らの理想とするのは「統一された自由のアイルランド」であり、現在のアイルランドは英国に支配されているので、「再びアイルランドのものに」しなくてはならない。それをするものは「アイルランドの英雄」であり、彼らは当然ながら「英国軍」「王立アルスター警察」と戦わなくてはならない。このような英雄への賞賛と、英雄の死への悲しみ、英国の不当な支配への怒りの描写がアイルランドの政治的バラッドの伝統なのであり、こうした「英雄物語」からは、ギルドホールに一般人が偶然紛れ込むなどと言うことは考えられないものなのである。

ギルドホールを占拠したのが百人ではなく、ただの三人だけだったことがわかり、彼らが射殺されてしまった後も、バラッド歌手は神格化、英雄化のプロセスを続けることになる。

Balladeer. In Guildhall Square one sunny evening three Derry volunteers were shot.

Two were but lads and one a mother; the Saxon bullet was their lot.
 They took a stand against oppression, they wanted Mother Ireland free.
 Their blood now stains the Guildhall pavements; a cross stands there for all to see.
 We'll not forget that sunny evening, nor the names of those bold three
 Who gave their lives for their ideal — Mother Ireland, one and free.
 They join the lines of long-gone heroes, England's victims, one and all.
 We have their memory still to guide us; we have their courage to recall. (56)

三人は今や“heroes”ではなく“volunteers”となっている。この表現は、暫定IRAの兵士や、蜂起に自発的に参加した義勇兵のことを意味する。何度も繰り返された蜂起、失敗、英雄の死という暴力の循環の中に当てはめて歌っているのである。そして、その目的は、当然のように「母なるアイルランド」を解放することであり、同様の目的を持った（と認識されている）「遠い昔に死んだ英雄」と同一視されることになる。過去の英雄のように彼らも「英国の犠牲者」として死ぬことになる。彼らが作り出した、「英雄が英国の不当な支配に抵抗して蜂起し、悪辣な英国の手にかかって死ぬ。悲しいことだが我々は忘れない」というセンチメンタリズムとナショナリズムによって美化され、政治的文脈を無視して単純化された「英雄物語」の物語の中に彼らは取り込まれているのである。この物語には、三人が偶発的にギルドホールに入ってしまう、丸腰で投降して射殺された、という事実の入る余地はない。以前も確認した、単純化のプロセスはここでも見られる。バラッド歌手は、「あの勇敢な三人」の名前を忘れない、と歌うが、この歌には彼らの名前が出てこないのだ。時間が経ち、事件の詳しい記憶が薄れてきても、歌が残ったとすると、それを歌う人々の脳裏には彼らの名前はないだろう。皮肉なことだが、「彼らの名前を忘れない」と歌うその歌手自身が、匿名化のプロセスを発動させ、三人を「イギリスに立ち向かって立派に死んだ英雄」という偶像に押し込めてしまっているのだ。どの英雄も同じパターンを踏んで死ぬのなら、英雄に名前はいらぬ。バラッド歌手がここで依拠しているのは、繰り返される英雄の物語という単一化されたパターンである。

バラッドは民衆の生活に深く根付いたものであるから、そこに見られる定式化、単純化の動きは、一般市民の深層心理に存在する一つの「歴史認識」を作っているといえよう。たとえば、RTEのレポーター、O'Kellyの報道からも、市民の同じような単純化の動きが見られる。彼は、「テロリストの一団がギルドホールを占拠した」という未確認情報について伝えたあと、次のように報道する。

O'Kelly. There are no reports of serious casualties but unconfirmed reports are coming in that a group of about fifty armed gunmen have taken possession of the Guildhall here below me and have barricaded themselves in. If the reports are accurate, and if the Guildhall, regarded by the minority as a symbol of Unionist domination, has fallen into the hands of the terrorists, both the security forces and the Stormont government will be acutely embarrassed. — usually reliable spokesmen from the Bogside insist that the story is accurate, and already small groups are gathering at street corners within the ghetto area to celebrate, as one of them put it to me, “the fall of the Bastille”. (22-23)

ここで注意しなくてはならないのは、このギルドホール占拠という未確認情報を受けて、市民の一部が、それを「バスターユの陥落」という革命的な価値を持つ出来事と結びつけ、祝っているという点であり、このことは、ギルドホール占拠をアイルランドの蜂起と直結させ、神格化、英雄化していたバラッド歌手の姿勢と共通するものである。バラッド歌手の中に見ることができた単純化、英雄化の歴史認識は、無意識のうちに北アイルランドの一般市民の中にも浸透しており、市民はその歴史認識に依拠して彼らの望む物語を構築していくのである。

市民の声は、劇中の別の箇所で、「声」の形で表現される。この市民の声は、「英雄物語」の不可欠な要素である、「残虐な英国による英雄の死」というステレオタイプを表現している。

Voice 1. There's at least a dozen dead.

Voice 2. Where?

Voice 1. Inside the Guildhall.

Voice 3. I heard fifteen or sixteen.

Voice 1. Maybe twenty.

Voice 3. And a baby in a pram.

Voice 1. And an old man. They blew his head off.

Voice 2. Oh my God.

Voice 3. They just broken the windows and lobbed in hand grenades.

Voice 2. Oh my God.

Voice 1. Blew most of them to smithereens.

Voice 2. Fuck them anyway! Fuck them! Fuck them! Fuck them! (31)

ギルドホールの中には3人しかいないのだから、彼らが話す、12人、15人、16人などの死亡者の数に根拠が全くないことは明らかである。さらに、赤ちゃんや老人が殺された、窓から手榴弾を投げ込んで皆殺しにした、といったことが語られるにつれて、彼らがやはり、バラッド歌手と同じ物語を持っていることがわかる。英雄たちは、政治的バラッドの多くが歌うように、暴力的で残虐な英国によって殺される、という物語である。つまり、彼らは現実に起こっていることを話しているのではなく、現実に「起こっているはず」と彼らが考えているものについて話しているのだ。

今まで見てきた「英雄物語」に大きな影響を与えるのが宗教的言説である。この作品で、宗教的言説は、葬儀を執り行う聖職者の声によって示される。彼は、ミサを知らせるスピーチの中で、彼らの死の理由を次のように「特定」する。

Priest. I believe the answer to that question is this. They died for their beliefs. They died for their fellow citizens. They died because they could endure no longer the injuries and injustices and indignities that have been their lot for too many years. They sacrificed their lives so that you and I and thousands like us might be rid of that iniquitous yoke and might inherit a decent way of life. And if that is not heroic virtue, then the word sanctity has no meaning. (31)

ここで、彼らの「信念のための死」が強調されることにより、「英雄物語」の別の側面が浮かび上がってくる。それは、カトリックに特徴的な「殉教」という物語である。カトリックは殉教を英

雄視し、殉教者を聖人として崇拜する。北アイルランド紛争においても、武装蜂起をして失敗した人間は「殉教者」となる。特に、“They sacrificed their lives so that...”の部分はこの殉教の物語が特によく現れている。この殉教の物語に沿って解釈すれば、三人の行為は「英雄的行為」であり、かつ、「神聖な」ものである。英雄化と神格化が殉教の物語の中で進んでいく。そして、神父は長いスピーチを、“May we have God’s strength to carry on where they left off.” (31) というせりふでしめくくる。彼らは信念のために死んだが、信念を実現させるために我々ががんばっていかうというわけである。これ自体は特に問題のないように見えるけれども、実際のところ、信念を実行しようとすればまた新たな死者が生まれるわけであり、新たな死者が生まれればそれは新たな殉教者として神格化、英雄化されることになる。つまり、このようなスピーチは殉教の物語を再確認し、再生産するものであり、「昨日の説教が今日の悲劇を生む」(MacGrath 110) ことにつながる。

聖職者もまた、自らの立場、つまり、カトリック教会に都合のよい物語を構築している。このことは、神父の二度目のスピーチからより明らかになる。このスピーチは前半は一回目と同じだが、後半に変化が生じる。

Priest. ... But although this movement was initially peaceful and dignified, as you are well aware certain evil elements attached themselves to it and contaminated it and ultimately poisoned it, with the result that it has long ago become an instrument for corruption.

Who are they, these evil people? I will speak and I will speak plainly. ... they have one purpose and one purpose only — to deliver this Christian country into the dark dungeons of Godless communism. (65)

神父が、上層部から、公民権運動と暫定IRAの関連を知らされた(Andrews)ことが一つの原因となっているのか、一回目と二回目のスピーチの間には明らかに心境の変化があったことは間違いない。一回目のスピーチでは殉教を賞賛していた神父が、二回目のこのスピーチでは「神のいない共産主義」に対する警告をしている。このことは、神父が公民権運動をキリスト教的視点から解釈していることを示すものだ。殉教は、「キリストの国」において、「神」のために死ぬ場合にのみ肯定されるものだ。公民権運動がキリスト教の教義と合致していると解釈されれば、先ほどのように三人を殉教者として英雄化、神格化するが、それがキリスト教の教義と相容れない共産主義と関係のあるものだとすれば、それは非難し、警告する必要があるものになるのである。

ここで、三人はカトリックの言説に利用されていると考えることができる。判事が、三人のことを、計画的なテロリストか偶発的なテロリストか、二つの可能性しか考えていなかったのと同様、神父は彼らを「避けるべき反面教師か、後に続くべき手本か」(Corbett)という、二つの可能性でしか見ていないのである。中立的な存在は彼の認識の中に入っていない。

4

今まで、この作品の分析を通じて、ギルドホールの占拠という一つの事実が、事実から離れた「物語」になっていること、また、アイルランドの「英雄物語」のように、その「物語」が、紛争を生じさせる温床を作っていることを確認してきた。英国側の「物語」は、報告書のかたちで「歴

史」に組み込まれてしまう。バラッド隊の歌う「繰り返される英雄の蜂起と無法な英国による鎮圧」という物語も一種の循環史観を形成している。神父が強調する殉教の物語もまた、カトリックによる、殉教者を主体とした歴史観である。ここまでくると、もはや歴史 (history) と物語 (story) は渾然一体となって区別がつかなくなってくる。ある程度の客観性を保たなければならない history が、主観的な story へと変貌してしまっているのである。そして、その story と history が融合したものが、新たな悲劇を生み出すのだ。殉教の物語、英雄の物語、英国支配に逆らうフーリガンの物語、これらの相互作用で悲劇が起こり、その悲劇を物語に準拠して歴史にし、その歴史が物語を再生産していくのだ。

実際の「血の日曜日事件」は、この作品で描かれる事件とは異なり、密室で起こったわけではなく、デモ行進の最中に、多くの目撃者がいるところで生じた。にもかかわらず、今まで見てきたように、実際の事件を巡る経緯においても、歴史と物語との融合が見られた。フリールはこの事件を描くに当たり、舞台を密室に移し、推測の入る余地を多くして、血の日曜日事件をめぐる歴史と物語との融合をより明確に前景化することに成功した。さらに、前景化された、歴史と物語の融合というテーマは、「血の日曜日事件」を考える場合だけでなく、ほかの国際紛争などにおいても考えなくてはならないテーマであろう。フリールは、「血の日曜日事件」を題材にしながら、作品に幅広さと普遍性を与えることに成功したのである。

参考文献リスト

- Andrews, E. 1995. *The Art of Brian Friel: Neither Reality Nor Dreams*. New York: Macmillan.
 Carr, E. H. 1961. *What is History?* New York: Random House.
 Corbett, T. 2002. *Brian Friel: Decoding the Language of the Tribe*. Dublin: Liffery.
 Dantanus, U. 1988. *Brian Friel: A Study*. London: Faber.
 Friel, Brian. 1974. *The Freedom of the City*. Loughcrew: Gallery.
 Macaulay, David. 1991. Caldecott Medal Acceptance. *The Horn Book*, 67, 410-21.
 McGrath, F. C. 1999. *Brian Friel's (Post) Colonial Drama*. Syracuse: Syracuse University Press.
 Schwoeble, A. J., & Exline, D. L. 2000. *Current Methods in Forensic Gunshot Residue Analysis*. Boca Raton: CRC.